

## 海外協定大学に TA を派遣する「日本語インターン留学」プログラム —その歩みと検証—

鹿浦 佳子

### 要旨

関西外国語大学（以後「本学」）留学生別科では海外提携の協定大学への TA（Teaching Assistant）派遣プログラムである「日本語インターン留学」を 30 年以上続けてきた。これは日本語教育実習を終え将来日本語教育関係の仕事に進もうという学生に対し海外での教授実践の経験を積ませ進路の一助とする目的で開始された。本稿ではこのプログラムに関してその意義と概要を述べ今までの歩みを振り返る。卒業後協定大学に派遣された TA にアンケート調査を行い、現地においての活動での課題、実習研修を含んだこの派遣プログラムの改善点などを探った。またこのプログラムが TA 派遣者にその後日本語教育関係のキャリアにどのように活かされているのかなどの調査も開始した。

【キーワード】 日本語 TA（Teaching Assistant）派遣プログラム、留学生別科、海外協定大学、日本語教育実習、キャリア

### 1. はじめに

海外提携校から多くの留学生を受け入れている本学留学生別科では日本語教員養成課程（以後、「養成課程」）の最終履修科目である『日本語教育実習』を長年行ってきた。また養成課程の修了生の中から選考して、卒業後海外協定大学に TA として派遣するという『日本語インターン留学』プログラムがある。将来日本語教育の道に進もうと考える意欲ある次世代の人材にできる限り有益な環境を提供しサポートするのが目的である。そこでは TA として実践力をつけさせるべく再度の実習研修を行う。大学学部生の養成課程に関しては、卒業後の進路の開拓についてどの大学も苦慮しており、大学日本語教員養成課程研究協議会などでも度々取り上げられてきた。大きな問題は資格の認定である。主専攻、副専攻、日本語教育能力検定試

験合格者などといった基準はあるものの、その基準を満たしたからといって卒業後すぐに日本語教師として活躍できるわけではない。国内・海外を問わず、日本語教員の募集要項を見ると、現場での教育経験を積んだ、すぐ役に立つ教員や多様化する学習者に柔軟に対応できる教員が求められている。学部学生が卒業後日本語教員になりたくても教授経験がないという理由で就職のドアは閉じられている。現在、準備が進められている国家資格が創設された後も、この状況が大きく改善されるかは不明である。大学ができることは教育実習の在り方を考え学生に対する進路のサポート体制を構築することであると考え、本学の TA 派遣プログラムが開設された。本稿ではこの 33 年の歩みを振り返り検証しプログラムの改善策を考える。

## 2. 先行研究

日本語アシスタントに関する先行研究としては、ネウストプニー(1995)が日本語アシスタントの教室内外での役割の機能性、重要性について論じている。門脇(2004, 11-23)はオーストラリアの高校における日本語母語話者アシスタントの背景を分析し日本語教育の知識を持ったアシスタントの必要性について言及し、非母語話者教員との協同授業の可能性について考察している。古別府(2006, 56-63)は養成課程のニュージーランドでの海外実習における短期実習生と日本語アシスタント(長期実習生)の違いを媒介語の使用についての認識と教授取得という観点から言及している。媒介語(英語)に関してはネウストプニーは日本語アシスタントには学習者の母語に堪能である必要はなくむしろ英語力のないほうが日本語の授業に成功する例が見られると述べ、また古別府(2009, 60-71)は英語圏中等教育機関の日本語教員はアシスタントに英語力を強く求めていると述べている。古別府(2022, 251)の勤務校では養成課程を終えた学生を在学中提携校に日本語アシスタントとして派遣している。多くの論文や報告書等で扱っているこれらの日本語アシスタントは養成課程を履修しているが学位はまだ得ていない。国際交流基金(2022)が行っている大学連携日本語パートナーズ派遣においては日本語教育を専攻している在学生のことをインターンと呼んでいる。本稿で取り上げているのは本学養成課程を修了した卒業生を TA として海外提携大学に派遣するプログラムである。このような学部卒業生の TA に言及しているものとしては下田(2001, 77)の大学が養成課程修了後、将来の目標と希望をもたせるために協定校に短期間派遣しているという点で本校と似ている。両校とも提携校との

信頼の下に大学院生ではなく学部卒業生を派遣している。相違点は下田の大学では実習を自身の大学で行っておらず日本語専門学校や海外の提携校に依頼している一方、本学では本学留学生別科で担当教師の指導の下、交換留学生に日本語を教える実習をさせ、実習研修においても更なる実習を経験させ、本学の修了認定証と学位を与えた後派遣を行っている点である。

大学院生による TA の役割については文部科学省のウェブサイト<sup>(1)</sup>に詳しいが Park(2004)は GTA (Graduate Teaching Assistant) の経験が経済的支援だけではなく将来の大学教員のための実習モデルを提供することに繋がるとし、渡邊他(2015)は GTA の経験は将来の教育者、研究者としての資質や能力を高める契機になっていると述べている。海外でも TA は大学院生であり大学院生以外は Intern と呼ばれるが、一般的に日本で呼ばれているインターンとは同じではない。従って本学学部卒業生でありながら海外協定大学において TA と同じ業務を果たし手当などの優待を受けているという点から本稿では彼らを TA と呼んでいる。

### 3. TA 派遣プログラムの概要

#### 3.1 本校における日本語教員養成課程と TA 派遣プログラム

本学養成課程の特色は、キャンパス内での実践的な日本語教育体験の機会が豊富である点である。留学生別科では世界 55 개국 8 地域 395 大学の提携校から交換留学生を年間約 700 名受け入れており、交流イベントや日本語授業へのボランティア参加などの交流の機会がある。また留学生別科の専任、特任日本語教員は全員養成課程科目を担当している。

養成課程科目の要件を満たした場合は、留学生別科における教育実習の履修が可能となる。実習生は原則初級クラスに配属され、クラス担当の専任教員が指導に当たる。実習内容は授業見学、課題等の添削、教壇実習等である。初級レベルの授業は英語を媒介語とするため実習を履修するにあたり TOEFL480 点以上の英語力保有の条件が課されている。

養成課程修了後の進路選択肢の一つとして日本語 TA 派遣プログラムがある。卒業後本学の協定締結校に 1-2 年間 (2-4 年の場合もある) 派遣され日本語の授業を担当もしくは、担当教員の補助をしながら日本語教員としての経験を積み資質を高めていくことに重点をおいたプログラムである。TA として海外の大学での日本語教育経

験を積むことができ履歴書にその経験を記載できる。派遣先大学によっては学期中の寮費、食費が免除される上に学部授業も無料で受講でき語学力や教養を身につけることもできる。業務内容は授業補助とは別に日本語学習者の個人指導や日本語会話クラブ、Language House の Resident Assistant 等の活動に参加する義務があり、派遣大学からの手当（謝礼金）が支給される。毎年要件を満たした応募者を対象に選考が行われ、内定者には派遣前にも再度留学生別科において授業見学、教壇実習を含む約4週間の研修が義務付けられる。この研修では派遣先大学に適應できるよう実習の時とは異なる日本語レベルのクラスを担当の専任教員の下で再トレーニングを受けられる。

このプログラムは鹿浦（2011）の報告でもあるように1990-91年度3名の派遣から始まった。養成課程は1987年に開始したため派遣は養成課程の学生が実習を終えるのを待つ必要があった。当初の1990年から1992年までの3年間は養成課程を履修していない外国語学部の学生から選考派遣され、翌翌年から養成課程を修了した学生の中から選考されて派遣されるようになった。表1は今まで派遣してきた人数と別科での教育実習の参加者の人数の変遷を表わしている。派遣人数は2年目、3年目に同じまたは他の大学において継続して教える人数を含み、1年目に選考された人数は新規人数として表されている。今年度で33年目となり派遣者は総数224名、年度平均では7名を派遣したことになる。2020-21年度の実習研修はコロナ禍のため実習演習に切り替え実習演習もオンライン形式で行われた。2021-22年度は実習、実習研修ともにオンラインで行った。

実習は、留学生別科において実際に留学生に教壇実習を行い、実習演習は、履修者同士で模擬授業を行い、養成課程修了にはいずれかの科目が必須となる。実習研修は実習または実習演習のいずれかを修了しインターン留学の選考試験に合格した者が派遣前に再度行う教壇実習などの研修である。

派遣終了後の進路としては、国内外での大学院進学、日本語専門学校や日本語教育関係機関への就職、一般企業への就職、英語教育関係の職業に就く等様々である。大学院進学の後、国内外での高等教育機関で日本語教員になっている者も多い。

表 1 TA 派遣者と日本語実習生の推移

年度	90-91	91-92	92-93	93-94	94-95	95-96	96-97	97-98	98-99
派遣人数	3	2	3	5	6	6	6	5	7
新規人数	3	2	2	3	2	5	3	4	4
実習生数	10	19	16	6	16	17	15	19	13

年度	99-00	00-01	01-02	02-03	03-04	04-05	05-06	06-07	07-08
派遣人数	9	11	13	15	18	14	17	18	16
新規人数	5	9	7	11	13	11	11	10	14
実習生数	7	19	11	12	19	13	13	18	25

年度	08-09	09-10	10-11	11-12	12-13	13-14	14-15	15-16	16-17
派遣人数	17	14	16	16	16	16	9	10	11
新規人数	8	13	11	8	8	5	5	4	5
実習生数	12	21	12	16	12	5	7	17	6

年度	17-18	18-19	19-20	20-21	21-22	22-23	総数 (平均数)
派遣人数	9	10	11	9	6	9	353 (11)
新規人数	5	7	5	2	4	6	224 (7)
実習生数	9	10	9	19	23	23	460 (14)

TA 派遣のプログラムを結んだ協定校は現在までアメリカに 22 大学、南米に 2 大学、ヨーロッパに 4 大学あり、中には MA プログラムに入りながら TA ができる大学もあり、受入れの条件は大学ごとに異なる。派遣数を増やすべく協定締結校を増やせばいいと考えられるがそれには課題が出てくる。授業開講状況や予算の確保といった協定校の事情で派遣が中止になったり TA の増員を求めてきたりするため派遣先大学が希望する学生数と本校の派遣できる学生数のバランスを取る必要があるからだ。TA 希望者が少なく派遣を希望されても派遣出来ない場合は、その後の派遣の依頼が来なくなることもあるため派遣協定校をむやみに増やす訳にはいかないのである。一方養成課程修了者の内 TA 派遣を希望する学生数が派遣可能な数を上回った場合、選考の結果、意欲ある学生が派遣されないということもある。

### 3.2 TA 派遣選考試験の応募資格、選考方法

応募資格は本学の養成課程を履修した者かつ TOEFL500 点以上もしくはそれに準ずる英語試験で所定のスコアを取得している者である。大学院希望の場合は TOEFL550 点以上を取得していることが望ましい。

養成課程の実習履修の条件の一つとしても英語能力 TOEFL480 点以上がある。これは本校の留学生別科における実習においては、初級クラスで英語を媒介語として話す留学生との文法説明や問題解決を行うなど詳細にコミュニケーションを取るために英語が必要となるからである。海外で TA として活動する場合派遣先大学から媒介言語能力として英語力が要求されるため TA 派遣選考試験の条件は更に TOEFL500 点以上となる。選考後派遣先大学から TOEFL iBT, IELTS, Duolingo 等のスコア提出を要求される場合もある。また国により英語のみならずスペイン語の能力も要求される場合もある。

選考方法は日本語教育能力検定試験に準じた筆記試験、日本語教育の知識や日本語教員の資質にかんしての意識などを問う面接試験、初級文法項目を教える模擬授業といった選考試験を行っている。基準を満たした合格者に対し、派遣大学に TA として推薦をし、渡航、ビザ申請などの手続きのサポートも行う。選考試験に合格した派遣候補生は在学中に実習研修を含む再度の TA 候補者研修を受け、研修修了して初めて派遣生となれる。3 月の卒業後 8 月の派遣までには時間があるため、意欲がある者は自己学習や教授法の実践を維持するためにサマープログラムのアシスタントとしても参加出来、派遣前にも実践力を強化することができる。

#### 4. TA 派遣者の意識調査

##### 4.1 TA 派遣者の渡航前の意識調査

2022 年秋学期から派遣された TA6 人に渡航前に次の項目の Google form を利用したアンケートで次の項目の意識調査を行った。

① 将来目指している職業②このプログラムに応募した目的③日本語関係の仕事に従事したい時期④いつどこで従事したいか⑤TA 活動を始めるにあたって不安事項⑥TA 活動で期待していることを尋ねた。

結果、全員が将来日本語教員を目指しており、半数が海外での日本語教員を希望してこのプログラムに参加したと回答していた。5 人がプログラムに参加した目的が「知識、経験を得て日本語教員としてのレベル向上を図り、自信が持てるようになりたい」と答え、1 人が「語学力とコミュニケーション能力を身につけたい」と答えていた。日本語教育に従事する時期は「TA を終えて直ぐ日本語学校に就職したい」が 1 人、「TA 修了後、大学院に進み修了後に高等教育機関で教えたい」が 3

人、「いつ、どこで教えるかまだ分からない」が2人であった。海外での TA 活動を行うにあたっての不安・心配な点は「コロナの影響で対面実習が出来なかったため対面授業への不安」、「現地到着の翌週からの授業開始のため生活リズムの調整が出来るか不安」、「2年間という長い間日本を離れるのが初めての経験であり実習修了時から時間が経つため一人で TA 業務をすることへの不安」、「言語の壁や授業が上手くできるか不安」などであった。派遣先で期待することは、「海外での日本語教育を見て自分のなりたい教師像を見つけない」、「実習で見つかった課題を克服してレベルアップしたい」、「与えられた業務において精一杯取り組み自信をつけない」、「日本語教育の知識を得て、経験を積み上手に授業が出来るようになりたい」、「日本国内と海外の日本語教育の違いは何かなど日本では分からないことを知りたい」、「語学力とコミュニケーション能力の向上を目指し、新しい視野でさまざまな価値観を持った人がいる世界を見たい」などであった。

#### 4.2 派遣先（現地）からの途中報告

同じ TA に派遣開始一か月後に①担当している授業②授業以外の業務③現地での生活④指導教員等との連携⑤履修している授業⑥渡航までに準備しておけばよかったこと⑦渡航までに準備しておいてよかったこと⑧その他報告すべきことについてメールでのアンケート調査を行いそれぞれの項目で以下の回答を得た。

- ① 担当している授業は以下の内容であった：JPN100 番代や JPN200 番代の初級会話クラスや初級レベルのディスカッションクラスである。日本語指導教員（Supervisor）の依頼で教案、スライド等の作成、クイズの採点や宿題等の添削、大きい試験のダブルチェックなどもある。教員が学会や研究会で抜ける場合、教員の代わりに授業を担当することもある。
- ② 授業以外の業務としては Japanese Table (または Conversation Table)の開催、主にクラスについていくのが難しい学生の指導を行う Office Hours の実施、日本語を履修している学生や日本文化に興味がある学生が参加する Japanese Culture Club への任意参加、日本語科の SNS 更新作業などであった。
- ③ 現地での生活の状況説明は次の内容であった。「円安の影響で現地での TA の手当が支給されるまで経済的に大変だった」、「公共交通機関が発達していないため車を所有していないと移動距離が制限されスーパーに行くにも一苦勞である」、

「TAハウスという場所で他の国から来た Language TA と共同生活を送っている」、  
「住居費と食費は無料で、学内のジムも無料で使用出来る」

- ④ 指導教員等との連携の内容としては「セクションミーティング」、「授業の引継ぎ」、  
「日本語指導教員が行う文法のレクチャー授業見学の後、会話クラスで使用する  
教案や PPT を作成し教員に添削してもらえる」などがあつた。
- ⑤ 履修している授業はあるかという問いには今回誰も履修していないと答えてい  
た。
- ⑥ 渡航までに準備しておけばよかったこととしては、「授業で使用する資料やレア  
リアなどの教具の準備やいろいろな教科書の事前チェック」、「コロナ禍でのオン  
ラインでの実習であったため行われなかった対面の実習」や「文法項目の英語で  
の説明の練習の準備」などであつた。
- ⑦ 渡航までに準備しておいてよかったこととしては「アカデミックでは授業で使う  
写真やチラシ等の収集」、「生活面ではお土産や使い慣れた日用品、常備薬の準備」  
などを挙げていた。
- ⑧ その他報告すべきこととしては次のような課題や悩みを挙げていた。「使用する  
教科書や担当教員の教授法が研修でのそれらと全く異なり戸惑つたという悩み」、  
「必須科目として取らされている学生の日本語学習者の学習意欲の低さにどう  
対処すべきかという悩み」もあつた。同様に「本学の留学生と異なり、外国語を  
1年間履修しないと卒業出来ないという大学では全員が「日本語を学びたい」と  
いう気持ちを持っていないためクラスの中でモチベーションが異なる学生達の  
指導が難しいという悩み」、「本学の实習で使用した教科書とは違う教材を使つて  
の指導は慣れないため大変であるという悩み」などがあつた。

#### 4.3 TA 派遣者の学期末意識調査

次に 1 学期の TA 業務終了後に①派遣先大学にどんなことに満足しているかそれ  
ともどんなことに不満足か②見つけた課題とそれに対する対応策③TA 活動をして  
得られた事④TA 派遣以前に日本語教員として必要だと思っていた資質から TA をし  
てみて必要だと感じた資質への変化⑤本学プログラムへの要望について尋ねた。そ  
れぞれの質問に対して次の回答を得た。

- ① 「日本語教員の指導の下で教授技術が学べる」、「大学の設備の良さ」、「日本語学



習者が熱心である」、「生活環境・仕事の環境・人間関係が良好である」、「クラブ活動などさまざまな活動ができる」、「日本語指導教員の下生活面でも支援を得て授業では自分の個性を生かした授業が許されている」、「指導教員がいないため自立性は養えるがフィードバックが得られず学びが少ないと感じる」などであった。

- ② 「日本語指導教員との意見が異なる場合、自分で対処するか他の国の TA に相談した」、「日本語初級の学習者の質問に英語で説明する場合、自分の英語能力の不足を感じその場で答えられない時は一旦持ち帰って準備を行い後日説明した」、「本学では 90 分授業であったのに対し派遣先での 50 分授業のタイムマネジメントが出来なかった場合、普段からアクティビティを考え準備してクラスで調整するようにした」、「英語力・コミュニケーション力・日本文化や歴史に関する知識の不足や学習者の声掛けなどの対応が不足したと感じた場合、日本語指導教員と相談したり他の国の TA と情報・意見交換を行い内省や振り返りの時間を設けた」などであった。
- ③ 「自分の短所長所を知ることができ課題や今後の目標について考えるいい機会となったこと」、「良き日本語教員・TA 仲間・日本語の学生と出会えたこと」、「たくさんの授業経験を積むことにより次第に慣れて成長を感じ自分らしく授業が行えるようになったこと」、「学生会議に連れて行ってもらったり日本語のイベントを開催する機会を与えてもらえたたくさんの新しいことに挑戦することができたこと」、「日本に行くために一生懸命勉強している学生と出会い自分も感化され頑張れたこと」、「海外で生活する大変さと同時に楽しさを経験できたこと」、「海外で活躍している日本語教員と出会え、多くの情報を得られたこと」、「海外の日本語教育の一端を知ることができたこと」などであった。
- ④ 「日本語に関する知識が大切だという意識から自分の教授法を常に内省することが大切だという意識が変わった」、「日本語の知識や国際的な視野を持つことからクラス内での柔軟な対応力や先を予想する能力が変わった」、「日本語の知識から日本語教育に対する情熱や学生を主体に考える気持ちや学生とのコミュニケーションを行う能力が変わった」、「コミュニケーション力から柔軟な考えや興味や好奇心を持ち続ける能力が大切だという意識が変わった」という意見があった。
- ⑤ 「派遣以前に派遣先大学の詳細な情報を得たかった」、「派遣中に他の大学の TA と情報交換や情報共有する場があればよかった」、「TA の前任者からの情報を得

たかった」、「派遣途中の TA と送り出し大学の教員やスタッフと近況報告やアドバイスの行える Zoom ミーティングをしたかった」などのコメントがあった。

#### 4.4 TA 経験者のその後のキャリア

227 名の TA 経験者のその後のキャリアについては現在追跡調査中である。把握したところでは、アメリカ、カナダ、フランス、ロシア、スウェーデン、アイスランドなどの海外や日本の大学で日本語を教授している人が 13 名、国内の日本語学校に就職している人が 4 名、日本語教授はしていないが関係する仕事に就いている人が 4 名、日本語教育と関係ない職業に就いている人 2 名である。

#### 5. 意識調査の結果と分析

調査した TA 派遣者の全員が将来日本語教員を目指しており、教えたい場所や機関は国内外、日本語専門学校、大学、大学院等さまざまであるが、TA を終えた後直ぐ大学院の学位を得て就職を計画している者も 3 人いた。選考試験の面接試験の際、卒業後のための就職活動は行わず TA 派遣のみに専念しているとも答えており全員早くから日本語教員を目指し意欲や熱意を持っていることも判明した。

現地での日本語教授に関しては TA 活動が始まり間もないので挙げられた課題は限定的であった。その中でも国内と海外の日本語学習者のモチベーションは日本の留学生のそれとは異なり温度差があると分かったという者もいた。同じクラス内で卒業のために日本語を履修しているという学生と本当に日本語を学びたいという学生のモチベーションの差は大きく対応が難しいという意見があった。本学の留学生のように日本に来ている留学生は日本語を学びたいというモチベーションが非常に高いが、海外では日本語を学びたいというモチベーションを持たないで日本語クラスを取っている学習者が多く彼らに興味を持たせる工夫をすることから始めなければならないため大変であるという意見であった。

使用教材は現地大学で採用しているものを使ってクラスを行わなければならないため初めて見る教材や見慣れない教材に苦労したという意見があったように派遣前には様々な教材研究の準備も有益である。

現地では他の TA と住居を共にしての関係性が密であるが、言語によって TA のワークロードが異なり、中でも日本語が一番大変な業務であり TA 間で不公平でありス

トレスに感じたという悩みも聞かれた。他の国の TA の状況は大学毎に異なるが、他の言語の TA と比較すると日本語が一番ワークロードが多いという状況が多く存在することも理解しておく必要がある。

初級クラスでの文法説明が英語で上手くできずに悩んでいると回答した TA が数名いることや近年米国の大学では TA に対して英語能力の引き上げを要求してきている大学も増えてきており、選考時点で一定以上の英語能力を課すという条件は今まで通り必要だと考えられる。

TA 派遣者が抱えている日本語教員に必要なと思う資質は派遣前と派遣後では異なることが判明した。派遣前は異文化や言語に関する知識が大切だという意識を持っていたが、派遣後では授業内での学生に対するコミュニケーション能力、情熱、柔軟な考えなど授業内での教授に関する能力が重要だと考えるように変わったことだ。

## 6. おわりに

大学院生でもない学部卒業生が海外で手当を支給される日本語 TA になることは難しい。しかし、本学のこの TA 派遣プログラムは留学生の相互受け入れ、送り出しを長年行ってきた協定校との信頼関係から成り立っている。留学生別科における日本語教育が評価され、同じ日本語教員に教育研修を受けた養成課程修了者だからこそ学部卒業生でも TA として受け入れられ、かつこれまでの TA 派遣者の貢献度の高評価が得られてこそ成り立っている。その中で協定校の日本語教員等と派遣元の担当者や教員との不断のコミュニケーションや連携も重要となる。派遣後は協定校の日本語教員等による派遣 TA の評価もこのプログラムの継続か中止かという決定に影響を及ぼす。筆者が協定校の日本語指導教員と連絡を取り合う中で分かったことは派遣先大学の TA に対する高い評価が与えられる資質は、柔軟性、適応力、社交性であるようだ。TA 本人も日本語教員としての資質を派遣前の知識の重要性から派遣後には授業内での応用力、柔軟性、対応力に資質に変化させていることも判明した。近年英語力に関しては協定校からの英語能力の要求が高くなっており、英語力の不足から苦戦する例も耳にする。そのため英語能力を選考条件からはずすことは考えていないし、基準をもう少し厳しくした方が良いとも考えている。

日本語指導教員のいない大学もあり、指導を受ける程度にも日本語教授の自由裁量にも差がある。TA 業務内容も業務に対する手当も住居や食事の費用の有無なども

大学によって異なり、派遣大学の条件の良し悪しを判断すること自体意味がない。同じ派遣大学の中での TA の業務も言語によりワークロードに差があるため、他の言語の TA の業務と日本語のそれと比べることも無意味である。他の国の TA との連携が強い大学においては、TA が直面する課題解決に他の TA からの協力が得られていい影響を得られている。

クラスの履修が出来ない大学もあれば、履修は授業料無料で 1 クラス履修できる大学や 4 クラスまで取れる大学もありさまざまである。クラスを履修できて自身も履修するのであれば、はじめての TA 活動をする場合、まずは TA 業務に慣れてからコースを履修することを薦める。大学院コースが取れる TA の場合はそういう訳にはいかず、TA 活動と同時にコースが始まるため自身の早めの準備が必要である。

本学としては選考試験の成績結果により希望派遣大学を考慮しつつ、適材適所になるよう考慮し派遣先大学を決定するようにしている。手当が支給されるプログラムであるが、他の食費住居費が無料、有料など処遇に差があり、ある大学が経済的に好条件だという表面的な理由で大学を希望してもらいたくない。TA の業務をする限りその対価を得るのはプロフェッショナルとして当然のことである。ただ、プロフェッショナルである以上、責任を持ち対価に相応しい TA 活動業務を行えるよう担当教員の指導、アドバイスを得ながら、勉強、努力することが最も大切である。

本学を卒業後に派遣が開始されるため、TA 派遣生からのメール連絡や帰国時に本学を訪問するようなことがない限り、本学担当者は TA の活動状況を知ることが難しい。派遣大学の担当者等から連絡がある場合というのは、主に契約期間が過ぎた時か TA 派遣生に問題が起きた時である。今後は担当者と今まで以上に密に連絡を取り合い、TA 派遣生の現状、課題、貢献度などを尋ね TA の成長を応援していきたい。今回、派遣生に渡航前と授業開始 1 か月後、1 学期後の意識調査のアンケートを行い、課題の一部を知ることが出来たが、今後は 2 学期終了後にもアンケート調査を行い意識や課題の変化を引き続き見ていきたい。派遣生のリクエストにも見られたように、定期的に担当者を交え、派遣生間の情報交換会、相談会も Zoom で行うことを計画している。また TA 派遣プログラムの修了生がどのくらい日本語教育にかかわっているかという追跡調査も継続して行っていく。

## 注

- (1) 文部科学省によるとティーチング・アシスタント (TA) とは優秀な大学院生に対し、教育的配慮の下に学部学生などに対するチュータリング(助言)や実験、演習などの教育補助業務を行わせ、大学教育の充実と大学院生のトレーニングの機会提供を図ると共に、これに対する手当の支給により、大学院生の処遇の改善の一助とすることを目的にした制度。

## 参考文献

- 門脇薫(2004)「オーストラリアの高校における日本語母語話者アシスタント教師の役割」『山口大学留学生センター紀要』(2), 11-23.
- 国際交流基金(2022)『海外の日本語教育の現状 2021 年度日本語教育機関調査より』
- 鹿浦佳子(2011)「関西外大日本語実習報告書—片銚・中宮キャンパスでの概要と報告—」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第 21 号, 71-88.
- 下田美津子(2001)「日本語教育実習における課題と展望」『文林』No.35,77-86.
- ネウストプニー, J.V.(1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 古別府ひづる(2006)「海外実習環境の創造と大学派遣日本語アシスタントの意義」『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』2005 年度,大学日本語教員養成課程研究協議会,56-63.
- 古別府ひづる(2009)「大学日本語教員養成における海外日本語アシスタントの成長-PAC 分析と半構造化面接による良き日本語教師観の変化を中心に」『日本語教育』No.143,60-71.
- 古別府ひづる(2022)「山口県立大学国際文化学部日本語教員養成課程四半世紀の歩み」『山口県立大学学術情報』第 15 号 249-256.
- 文部科学省「ティーチング・アシスタント(TA)について」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/07011713/001/002.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/07011713/001/002.htm)  
(2023 年 1 月 25 日)
- 渡邊巧・大坂遊・草原和博(2015)「大学院生の学習システムとしての GTA の体系とその意義—クリス・パーク論文が教育学研究者・教師教育者の育成に示唆するもの—」『学習システム研究』創刊号 16-29.
- Park, C.(2004). The Graduate teaching assistant(GTA):lessons from North America experience. *Teaching in Higher Education*,9(3). 349-361.

(shikaura@kansai.ac.jp)

